

# 四十年の歩み



倉田ミチ

死者の遺児が十四名位いました。

## 教員養成所入所

明治四十年に、教員養成所へ入所、二カ年の課程を経て、小学校教員となり、大正五年退職。この間、七カ年を経た後、家庭に入り、一男二女をあげ、主人の務めの関係から、奈良、敦賀を転任して、再び、山口に帰ってくるようになりました。

## 龜山幼稚園を継ぐ

大正十二年六月、四代目園長、木村先生の後を受け、主人が設置者として、経営管理にあたり、私は、園長として、保育の全般を受けもつことになりました。

思えば不思議な因縁で、位置こそ現在の地に移転していましたが、十七年を過ぎて、再び、この思い出の園に十八坪の住居をかまえ、今日まで、永い歳月を幼きものとともに暮して来た園の生活をふりかえってみると、いろいろつらかったことやうれしかったことなどが夢のように思い出されてなりません。

## 当時の園の状況

当時の園の入口は、人口一万八千足らずの小さな町で、幼稚園としては、町の北部にある外人経営の幼稚園と東部にある当園との二園があったに過ぎず、父兄の系統も自ら異り園児数も、どちらも四十名一組位で、施設も設備もみるものなく、保育内容についても、フレール恩物、モンテッソーリ教具など感覚教

育が盛んに行なわれ、手技、折紙、組紙で複雑な模様を組んだりしておりました。

現在、保存されている古い参考書には、明治十一年文部省発行の「幼稚園恩物(図形)五部」や「幼稚園」(桑田親五訳)などがあり、歌は、文部省唱歌「東郷さん」「水師営会見」や「鉄道唱歌」「カラスがアカア」「チチババ」などをよくうたわせていたものです。

## 幼稚園令発布の頃

大正十五年、幼稚園令発布以来、遊戯、唱歌、観察、談話、手技の五項目が示されましたが、私の今までの経験では、とても、家庭教育を補い、生活指導を主体とする幼稚園のいき方に、自信のもてないことばかりで、参考書もなく、程度も具体的なものはなく、ただ、朝夕、倉橋先生の雑草に、読みふけり、育て心の何ものであるかを会得しつつ、幼児にあらわれる種々の場面の表情や動作に、学びとるなど懸命な努力を重ねて、勉強しなければなりません。

## 環境の整理

旧園舎は、雨はもり、蝙蝠の巣となるなどで、大修理に着手し、屋根をふきかえ、雨戸は、ガラス窓に取り替えて、ようやく夜の明けた明るさの中で、園児たちが嬉々として遊ぶ姿が見られるようになってきました。父兄もだんだんと経営に理解をもつようになり、自発的に、この時の修理費三百円也の

四十年の歩みを書くに当たり、心に浮かぶものは、ただ、子どもと明けくれた生活ばかりで、余りに平凡過ぎる資料とペンの貧弱さに、たじろぎながらも、古稀を重ねた私としては、倉橋先生を始め、斯界の諸先輩の方々に報いる意味も考え、また、愛誌のために一言でも思い、つたないペンをとることを決意しました。

## 当園の助手時代

当園は、小学校時代の恩師、井本校長の個人立として、明治三十七年四月創立されたもので、その翌年五月、私は、同園長のもとに助手として、始めて、幼児教育の世界に入ったわけがあります。

当時は、日露凱旋のさなかのことであり、園の中に、戦時保育所も併合されており、戦

寄付を寄せられ、外庭には、遊具一揃を設けることができました。

記念植樹の計画も次第に進み、中でも現在、園庭にある柳の大木二本は、生花の残り庭に挿したのが、スクスク育ったもので、園庭に風情をそえ、園児たちのいこいの日陰ともなり、古い園の歴史を物語っているかのようにあります。

### 二十五周年と園舎増築

昭和三年、園児の増加にともない、二十五周年 記念事業として、二十一坪の保育室の増築をはかり、同年十月、落成式を挙げ得るまでにこぎつきましたが、これも、ひとえに当時の熱心な有志の方々の御援助にまつところが大きかったことは、ただただ、感謝の外はありませんでした。

### 母の会（若葉会）の結成

当時、有志が、たびたび集合しては、熱心に子どもの日常の問題について話し合う場が、もたれ、お母さん方と先生との親しみの度を深めるに従い、楽しい集りとなり、次第に盛りあがって若葉会の結成となりました。いろいろな講師をお招きして、講演会を催したり、たびたび、県の衛生技師をお招きして、子どもの保健衛生面に意を注ぐなど、バザーの純益を資金とした会の団体活動は目ざましいものがありました。

### 保育の特別計画

その一、夏季保育 休みの間の一週間を保育日とし、昭和七年より、山や川や温泉その他郷土観光には、母子同伴で楽しむ一日を送る例となり、現在もなお続けております。

その二、臨海保育 一日海遊びは、昭和十年より戦前まで続けてきました。当時は、学校でも、こうした計画がなく、家族連れの一は、百五十人位で、看護婦、写真師らも行に加わり、今日のようにバスが便利でなかった当時、汽車で二時間かかる浜への一日の行楽は、たいへん楽しいものでした。

その三、雑遊戯会。昭和三年から現在まで、毎年、三月には遊戯会を催しています。これは、年間保育の発表会であることももちろん、卒園者の同窓会でもあり、送別会でもあり、古くから伝統をほこるおどりがあつて数年前、東京亀戸の幼稚園、山内勇仙先生が来訪された時、持ち帰られた写真を「亀山幼稚園の生きたお雛様」と題して、誌上にのせられた光栄に浴したこともありませう。

その四、茶話会。茶話会は、月数回、会食をする子どもたちの最も楽しい日です。十二坪の教材園に、そら豆、大豆、芋、カボチャ、時には稲を植え、自作の収穫物で豆御飯、赤飯、焼き芋或いは、餅をつきあられにし、皇太子様の御誕生日には赤飯、節分には豆まきなど、自作のものを用いる時は、味も一段とよく、生きたよい資料となっています。

その五、運動会、遠足。どちらも、家族そろっての楽しい行事ですが、運動会は、五月の小運動会と秋の大運動会の二回、遠足はバス旅行も入れて母子連れ年三回行なうことにしております。

その六、仲よし会 新入園希望の子どもを、十二月から入園時まで、三回、半日入園させ、子どもを観察するとともに、園にできるたけなじませようとしています。

昭和十五年二月、教育功労者として、知事表彰を受け、同年十月には、憲法記念会館における教育勅語演説五十周年式典に県下の園長七氏と共に参列し、同年十二月には、愛育会総裁の宮より表彰を受けるなど、数々の光栄に、ただただ、感激のほかはありませんでした。

二十年六月には、幼稚園を休園し、戦時保育所として、万事戦時態勢の運営に切り替え、八月の終戦を迎えたわけでありませう。

その後、二十三年六月、再び幼稚園に復帰しましたが、万事占領下にあつて、紙芝居なども福岡まで持参して、検閲をうけなければならぬ有様でした。

二十三年学校教育法の改正とともに、戦後の新しい教育のあり方について、絶えず研修の場をねらい、単位認定講習会、研究会と目まぐるしくかけまわり、文部省主催の指導者

講座に出席し、各地有名の先生の役について新教育の内容や方法などにつき研鑽を積み、数々の問題を討議して、熱意あふれる努力と勉強に力を得て、楽しく学んできました。三十五年には、運動場の拡張を計画し、十三坪を拡張して秋には大運動会を催すことができましたが、最低基準の線に如何にして達するかは、私どものように古い伝統に生きてきた幼稚園ほど、その悩みは大きく、園舎の増・改築に要する財源難が苦勞の種となっておりますが、その筋の御配慮により、融資の途が拓けることを特に切望してやまないものであります。

風雪四十年、この間、卒園児三〇〇〇人を数える今日、恵まれた家庭に、スクスクと伸びゆく子は、将来にかけける期待も明るい、不遇に育った子については、特に関心が深くならざるを得ないものであります。

親に捨てられ、弃当の用意までしてやったあの子が、後に召集をうけたからと言って、紅白の餅をもって別れの挨拶に訪れてくれた時など、よく立派に成長してくれたと嬉しさとたのもしさで一杯だったが、その後、駅頭で送ったその子が、戦死したとの報を聞いて、ガツカリさせられたこともあります。ノモンハンの戦場で最初の犠牲となったあの青年や、特攻隊員となり、長文の遺書をどけて沖繩に散華した勇士など、目まぐるしかった世

相の移り変りとともに、走馬灯のように数々のいたましい記憶がよみがえってきます。

県私幼協会は、その昔、保育会と称して、大正十三年十一月、本園で発会式をしたもので、保育園、公立を合わせて十三園に過ぎなかったが、幹部の先生方の熱意に、ひかれて人間的に育てられ、同じ道に進む喜びと勇気をもって、互に助言し、励ましあって、今日、百四十園の大世帯となった県下幼児教育の源を築きあげた功績は大きいものがあります。

旧幹部のうち現存している者は、岩園染香幼稚園長熊谷先生と私の二人のみとなり、当時のことを思い出すたびに、感慨無量なものがあります。

昨秋、熊谷園長の特志で、物故者七氏(當園の前園主を含む)の慰霊祭が行なわれ、遺族相い寄り追憶の場がもたれ、涙あらたに故人の遺徳を忍ぶとともに、ありし日の遺業をたたえて冥福を祈りあったのでした。

さらに、双葉会についても書き加えておきたいと思いますが、この会は、市内九園約四十名の幼稚園先生からなる会で、昭和六年、発足以来引き続き、研究会に、共同視察に、子ども大会に、教育委員会を通じ幼小連絡に、公開保育や学校参観など、学校教育との一貫性をめざして活発な活動を続けており、創始者としての私にとっては、忘れられぬ数

々の思い出があります。

このたび、はからずも教育功労者として、文部大臣表彰をうけることになり、昨秋、十一月七日、上野文化会館に御臨幸を仰いだ両陛下の御前に表彰をうけましたことは、身にあまる光榮に感激をあらたにし、この道一筋に生きぬいた幸を限りなくよろこぶとともに、長い間、陰の力となって見守って下さった方々や、各地先輩の方々に温く導かれた尊い御恩を忍んで、拙い筆ではありますが、私の「四十年の歩み」を終わります。

附記

表彰歴	山口知事より	前園主	経営功勞	昭二四・五		
	山口知事より	園長	教育功勞	昭一五・二		
	財団法人愛育	園長	幼児教育	昭一五・二		
	会	園長	功勞	昭一五・二		
	日私	園長	幼年勤統	昭二九・七		
	山口市長	園長	教育勤統	昭三四・一		
	山口県私幼協	園長	五十年以	昭三七・六		
	会	園長	上経統	昭三七・六		
	文部大臣	園長	教育経統	昭三七・二		
園の現況	園舎	建坪	八四坪	総坪数	二九〇坪	
	設置者	六代目	倉田利雄	昭三一、七	(目下渡米中)	
	職員	四、	一級	一名	二級	三名
	組数	三				
	在園児	九七名				
	卒園児	創立以来、	三八五九名			(五十八回まで三十七年)

(山口 亀山幼稚園長)